

管内の農畜産物生産量をカロリー換算し、住民のカロリー摂取量で割って算出した。十勝に限定した食料自給率は、地域の生産力の指標になり、対外的なPRにもなるため同協議会が毎年試算している。

22年度は、耕種部門が6月中旬以降の曇天や多雨、日照不足の天候不順などで多くの作物で生産量が減少。中でも小麦やビートの落ち込みが顕著だった。畜産部門は昨年並みを確保した。

このため食料自給率は1170%と、豊作で生産量が増え

た昨年の1339%から低下した。単純比較はできないものの、21年度の全国の自給率は38%、20年度の北海道は217%となっている。

米沢会長は、天候不順や生産資材価格の高騰で農業現場は厳しい環境下にあるとした上で、「長年培ってきた経験や技術を生かしながら、地域では着実に営農活動が行われており、十勝農業の力強さを改めて感じる」などとコメントを出した。

畑 作

小豆作付け拡大を 需要拡大、ホクレン呼び掛け

2022年4月28日（木）

道産小豆の需要拡大を受けて、ホクレン帯広支所が今年産の小豆の作付面積拡大を呼び掛けている。

道産小豆をめぐるのは、コロナ禍の外出自粛などで一時期は需要が減ったが、輸入からの切り替えなどで回復傾向にある。同支所によると、3月までの半年間の小豆出荷数量は、前年同期比36%増で推移。「不安定な輸入原料の流通事情を受け、道産原料への要望が高まっている」（米麦農産課）としている。

資材価格など生産費が上昇していることから、道雑穀類懇話会が調べる豆産地相場（4日）は、1,000円上がり1俵2万1,000円（素俵）となった。

十勝は小豆の生産量で国内の7割を占める一大産地。他産地の作付面積が伸び悩む中、安定供給の面でも十勝の作付けと生産量の確保が期待されている。

同支所は、26日に開かれた十勝地区農協畑作・青果対策委員会で需給動向を説明し、は種時期直前の「最後のお願い」をした。同課の森下泰輔課長は「1反でも5反でも空いたほ場に小豆を作付けしてもらえればうれしい」と話していた。



小豆の作付け拡大を呼び掛ける
（右から）森下課長と野川真寛係長

北糖本別 最後の製糖 操業1カ月短く ビート収量減

2022年10月17日（月）

【本別】今期限りの生産終了が決まっている北海道糖業本別製糖所（本別町勇足）で、最後の製糖作業が行われている。原料のビートを受け入れて12日から加工を始めた。収量が平年を下回る予測から、工場は来年1月中旬までの稼働を計画。来期からは生産は社内外の別工場に委託するが、拠点機能は残して原料の買い付けは続ける。

同工場は管内8町からビートを集荷し、グラニュー糖を製造している。今年産の作付面積は約5,000ヘクタール（526戸）で、湿害や病害虫の影響で収量や糖度も平年を下回るとみている。操業期間は収量に左右されるため例年より1カ月以上短くなる見通し。同工場の土肥拓副所長は「今年で製糖は終わりだが、いつも通り安全な操業に努めたい」と語る。

同工場は1962年、旧大日本製糖が建設し、68年から北糖本別製糖所になった。陸別町から広尾町まで管内東・南部のビートを受け入れて発展してきたが、近年は砂糖

需要の減少や生産設備の老朽化などに直面し、拠点見直しの中で本別の生産終了が決まった。

来期以降も原料の買い付けなどは続けるが、製造は北見製糖所（北見市）や資本業務提携を結ぶ日本甜菜製糖芽室製糖所（芽室町）に委託する。ビートは両工場に直接運び込むか、本別製糖所の敷地内に一時的に保管して転送。製造された砂糖は北糖ブランドで販売する。

畑作の輪作体系の中で生産されてきたビートだが、重労働やコストなどの面で作付けは減少傾向。本別町内の50代の農家は「多くの農家にとってビートは中心的な作